

⇒一瞬のウキの動きも見逃さぬよう集中して水面を見つめます。



ヘラブナは、警戒心が強く臆病な魚で簡単には釣れないことが最大の魅力で、本当の釣り好きがハマるのがヘラブナ釣りと言われています。じっくり戦略を練る釣りで、繊細なウキの動き（アタリ）を読み解き、エサの配合や仕掛けをミリ単位で調整して狙い通りの一匹を釣る奥深いゲームフィッシングという一面を持つ釣りとも言えます。

～びん沼川で釣れる生きもの(一例)～



ヘラブナ

「釣りの聖地」の主役。植物プランクトンを食べ、体高が高く、平たいのが特徴。ゲーム性の高い釣りが人気。



ギンブナ(マブナ)

身近な「フナ」の代表格。実はメスだけで増えることができる不思議な生態を持ち、非常に生命力が強い。



ハヤ

銀色の細長い体で、流れのある場所を好んで素早く泳ぎます。びん沼の生態系を支える身近な小魚。



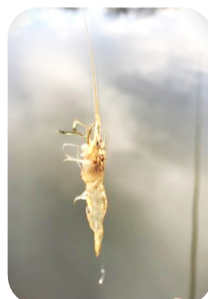
ナマズ

大きな口と長いヒゲがトレードマーク。夜行性で夕暮れ時になると小魚やカエルを狙って活発に動く。



コイ

川の力持ち。何でも食べる大食漢で、1メートル近く育つことも。びん沼の底で力強く泳ぐ姿が見られる。



テナガエビ

その名の通り、オスは体よりも長いハサミを持つ。初夏には岸辺の石の隙間などで釣りの対象に。



モクズガニ

ハサミに濃い毛が生えているのが特徴。秋になると産卵のために川を下る、季節を感じさせるカニ。

写真・取材協力：高野敏行さん(びん沼川で釣れる生きものの写真)

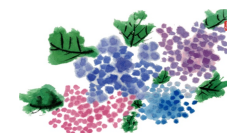
写真協力：加藤栄三さん(びん沼川の写真)

☆南畑公民館ホームページに掲載の南畑公民館だよりではカラーで魚たちの写真をご覧いただけます。



びん沼散歩PART II

全国からファンが集まる ヘラブナ釣りの聖地へ



「びんぬま」の 名前の起源

びん沼川は元々は荒川の支流でした。しかし雨が多く降るとすぐに洪水が起きてしまうため、1925年(大正14年)から改修工事が行われ、現在の幅広くまっすぐ流れる荒川が作られました。その結果、びん沼川はせき止められて蛇行するかたちのまま遊水地となります。せき止められた瓶のような沼ということでは「びん沼」と呼ばれるようになったとのこと。

全国的にも有名な 釣りのメッカ



魚の放流量、魚影の濃さが関東一とも呼ばれるびん沼川は、全国的にも有名な釣りのメッカです。年間を通して楽しめる釣り場ですが、ベストシーズンは4月下旬から10月末とのこと。

ヘラブナ、ブラックバス、ブルーギル、オイカワ、ニホンナマズ、タナゴ、コイなど多種多様な魚が釣れるということ、毎日多くの釣り人で賑わっています。その数は、平日でも500人、週末には1000人以上の釣り人が訪れる程。これらの魚は、四国で養殖され、毎年11月から12月にかけて全部で6トン程の稚魚が四国から運ばれて放流されているそうです。

ヘラブナ釣りの聖地 びん沼

特にびん沼川を有名にしているのは、ヘラブナ釣りです。ヘラブナ釣り師なら知らない人はいない程有名で、県外からもヘラブナを求めて訪れる方もいるそうです。ヘラブナは、琵琶湖の固有種であるゲンゴロウブナを品種選別して生み出されたフナの一。大きさは平均20〜30センチくらいで大きいものは、50センチほどにもなります。(びん沼では45センチほどが最大)

今号はお散歩企画PART IIということで、私たちの身近な川、びん沼川をお散歩してみました。すると川沿いにはたくさんの方々がいました。そこでびん沼川での釣りの魅力についてお話を伺い、びん沼川の新魅力を発見することが出来ました。

(担当/平塚嘉代子、北島由紀、吉川美佳)
